近松の死と

享保大火に絡む因縁話

享保九年一月十五日、竹本座へ上演した近松門左衛門の傑作『關八州繋馬』は、堂々たる長編物で、内容も複雑變化を極め、而かも舞臺構造の大きな面白い芝居であつた爲に、名人政太夫の口からひとたびこれが世上に傳はると、それは〳〵大變な評判となつた。さうして二月一ぱいこれを打續けるほどで、まづそれまでは無事であつた、評判と市中の人氣が騰るにつれて、誰れいふとなく、不思議な風說が立てられて、だん〴〵に擴まつて行つた。その風說といふのは、近々この大阪市中に大火が起る。あんな芝居を出されては皆が迷惑をする、とかういふ噂であつたが、無論そんな迷信のやうな取り止めもない噂には座方の者だつて、好人氣に醉つてゐる時ではあり、誰れ一人氣にかけてゐるものとてはなかつたのである。而しその噂の起りといふのは、まんざら心當りが無い譯ではなく、この淨瑠璃の第四段目、多田の御所、源頼信の御臺所、伊豫の内侍の寢所の塲にこんなところがある。

内侍は毒婦小蝶の死靈に祟られて病臥してゐる。この寢所に詰る頼信四天王の女房達は、何とかして怨靈を攘ひ除け、内侍の欝氣を散ぜんものと、より〳〵工夫を廻らしてゐる。中でも小幡の才覺で、今宵は恰ど七月十六日の精靈會、京の東山の大文字燒の行事を、こゝの庭前に寫して見てはとの妙案が立てられた。東山の大文字は、もと〳〵魂祭の聖靈を送る送り火だから、娑婆に迷ふ妄執を攘ひ除ければ、内侍の御惱みも除くことが出來やうといふものである。皆は勿論同意をした。庭の大築山を京の如意嶽に見立てゝ、多くの柴を積み重ねて大の字劃を作り、八方から火をかけると、さながら京の大文字を見る光景である。やがては燃えさかる猛火の中から小蝶の亡靈が現はれ、内侍を對手にして、謠曲土蜘蛛を取り入れた景事になる。

此時である。からくりや、あやつりを應用し、舞臺裝置にも思ひ入れ凝つたところを見せてウンと見物を喜ばせた。ところが喜んでゐた筈の見物の中から、舞臺の『大』の字が盛んに燃えるのを見て、大阪の『大』の字を燒かれては堪らぬ、きつと近々、大阪大火の前兆だとかういふところから噂は大きくなつて來たのである。流言蜚語もまんざら馬鹿には出來ぬもので、不思議とも奇蹟とも、この興行が終つてまだ一月とは經たない、同年三月二十一日午の刻（正午）堀江橘通三丁目（現在西區南堀江上通三丁目）金屋治兵衛の祖

母妙智の隱居所から火を發して、燒けたも燒けた大阪全市の九分五厘まで、まつ黑焦げになつてしまつた。當時の記錄によると、西南の大風に乘じて堀江から新町へ阿波座京町堀江戸堀を燒き拂ひ、船場に入り座摩神社から津村別院を嘗め、火は次第に北へ延びて中の嶋から曾根崎天滿へ及び、とう〳〵長柄にまで飛んだ。夜になつて風位は西に轉じ、今度は東大阪へ飛び上町に移つて、東西兩町奉行所、その他の官署を倒し、一方東天滿から與力同心屋敷を襲ひ、備前嶋相生町に及んだ。翌二十二日曉方には、風は轉じて東北となり全所各所に散在してゐる火焰は一齊に南西へと這ひより、嶋の内より道頓堀に延燒し、申の刻（午後四時）に至つて漸やくその猛威を收めた。凡そ三十時間に亘る大火は、燒失町四百八丁、家一萬七千七百六十五軒、市外三百六十二軒、竈數六萬二百九十二、藏屋敷三十二ヶ所、死者二百九十三人、その慘憺たる光景は、さながら先年の關東大震災の有樣であつたらう。

近松門左衛門の像

一時の流言がとう〳〵事實となつて、こんな怖ろしい結果を見ることになつたのである。その時、道頓堀では、榊山小四郎座と松嶋岩太夫座を除く外は全部燒失、津川萬太夫座、出羽座さうしてわが竹本豐竹兩座は不分明であるが、その他關係者は悉く罹災民となり、更に市中の罹災光景は、かういふ場合には習はしの窮民と暴徒の輩出となり、政治經濟の上に及ぼした惡影響は實に言語に絶したものがあつて、自然人々の口からは、竹本座の芝居の豫言が的中したので、『それ見たことか』といといふ風にまた云ひ囃した。

さうして此年十一月に、この因緣にからまれた『關八州繫馬』の作者近松は、七十二歳を一期として、大往生を遂げてゐる。無論その死は病死であるが、恭謙細心な近松の人格を思ひ、この不思議の大火を思ひ合はせる時、近松の死を早からしめる上に何等かの關聯がまんさら無かつたとは云へまいと思ふのである。已が作から流布された蜚語が、大阪全市にかやうな不祥事を起して、作者近松たる者（勿論作者も罹災民の一人であつた）眼前その光景を眺めさせられては、定めし悲痛傷心したらうと想像される。さなきだに、その

頃の近松は多くは、病床に親しんでゐた。一年に三四種或は五種の作を年々發表してゐる近松がこの終焉の前の享保八年は殆ど執筆を絶つてゐて翌九年に漸やく此作を書いてゐるほどだから、少し病ひは快復はしてゐたといふものゝ、かういふ心痛の種を蒔かれては、大打撃を蒙らざるを得ない。さうして『關八州繋馬』といふ名作は遂に近松の絶筆と爲り、時代物中屈指の名作でありながら『火を呼ぶ』といふ因縁に崇られて、とう〳〵劇壇から封じ込められるといふ飛んだ厄難に出逢つてしまつた。

竹田出雲と周圍の人々

忠臣藏初興行の騒ぎ

近松門左衛門逝き、竹本播磨少掾歿後の淨瑠璃界は、當然の歸趨でもつて、その實權が、作者としての奇才興行主としての辣腕家たる、竹田出雲の手に移つて、義太夫節は暫く太夫を離れ、從つてすこしづゝ其容を變へて行くのは是非もないことであつた。すでに十五歳にして竹本座の座主であつた（父竹田近江の後見はあつたにせよ）出雲は長ずるに從つて十二分の經驗に加ふるに、殆んど天才的の手腕をもつて縱横に活躍したのである。さうして道頓堀の黄金時代、古今無比の最盛期を現出したと傳へられる。

竹田出雲の像

延享版の『淨るり譜』は

此頃操り流行して歌舞伎は無きが如し、芝居表は數百本の幟、進物等數を知らず、東豊竹、西竹本、と相撲の如く東西に別れ、町中近國ニイキをなし、操りの繁昌言はん方なし。

と云ひ、又寶暦版の『竹豊故事』には

操り繁昌し東は西に負けじ、西は東に勝たんと互ひに勵み出來、益々芝居繁昌し、淨瑠璃の作者種々樣々の趣向をあみ出し、道具立衣裳に金銀を措します、美麗を盡し、町中の若い衆、豊竹講、竹本講と號し、毎月掛け錢を集め置き、替り淨瑠璃の節進物の入用に仕玉ふとかや、偖々奇特千萬なる心中益々信仰なさるべし。